［講演記録］
鶴見俊輔「ハンセン病との出逢いから」

日　付：2001年７月１日（日）
場　所：多磨全生園コミュニティセンター
主　催：高松宮記念ハンセン病資料館

１．あるハンセン病患者との出会い

いま、成田〔稔〕運営委員長[1]からご紹介がありまして、大谷〔藤郎〕先生[2]のご挨拶がありました。お二人はハンセン病についての専門家なんですが、私はまったく素人としてこの中に導かれてきたので、私が会ったことからお話ししていきたいと思います。

1945年に、戦争は負けて終わったんですけれども、それから間もない頃に、リトアニア人の医者から私のところに電話がかかってきたんです。

「今日、県の役人が自分のところに来るんだけれども、自分は日本語がよくできないからうちまで来て通訳してくれないか」と言うんです。

そこに行くと、少年が座ってるんです。私はびっくりしたんですけれども、「あっ」と思うほどの美少年なんですよ。県の医者が来て、それに、リトアニア人の医者が、英語を使って言ってるんですが、「この少年を診ているんだけれども、膝が曲がらなくなって、自分はハンセン病だと思う」。県から来た役人も医者なんです。見て、「そうだと思う。県で引き取ろう」と言ったんです。

そこまでなんですよ。私が出会ったのは。戦争が終わってすぐなんです。

２．山荘に生きる帝政ロシア

それから10年経って、私は群馬県の草津の療養所〔国立療養所栗生楽泉園〕に、大江満雄[3]っていう詩を書く人に連れられて行ったんです。その時、『近代文学』を始めた山室静[4]も同行していました。

草津に行ったから、ふと思いついて私は、「ここにロシア人はいませんか？」って言ったんですよ。そしたら「いる」っていうんですね。彼の名は、コンスタンチン・トロチェフ[5]。

私は大江さんといっしょに、そのロシア人の家を訪問したんです。寒いところなんですが、掘っ立て小屋みたいなところで。一歩入ったらそこは、帝政ロシアなんですよ。これには驚いた。

どうして帝政ロシアかっていうとね、ロシア正教のアイコンが置いてあるのと、もうひとつは、占領下ですよね、占領軍の兵隊が『LIFE』やなんかのグラフ雑誌をとるでしょ。その頃、トルストイの『戦争と平和』っていう長編小説を、英語の映画にしたんですね。そういうものの断片が、切り抜いてこうやって、壁に貼ってあるんですよ。本なんか置いてあるんですが、ロシア語の本は、ポタペンコ全集が置いてあるんです。みなさん、ロシア文学に通じておられる方、あると思いますが、ポタペンコに通じておられる方はおられないでしょう。

少年は、青年になっていますが、その祖母、お

---

(1)　成田稔（1927-）。医師。多磨全生園園長などを経て、2007年～ 2021年国立ハンセン病資料館館長。この講演当時は、高松宮記念ハンセン病資料館運営委員長。講演会の司会を務めた。

(2)　大谷藤郎（1924-2010）。医系技官。厚生官僚としてハンセン病政策に携わる。1993年から高松宮記念ハンセン病記念館館長。らい予防法廃止に取り組み、1996年法律の廃止を実現。その後もらい予防法違憲国家賠償請求訴訟では証人となり2001年の原告勝訴に導いた。この講演は、同訴訟の判決に対し国が控訴を断念して判決が確定した2001年５月23日から１か月余しか経っていない高揚した雰囲気のなかで開催され、大谷も訴訟の意義について触れる挨拶をした。

(3)　大江満雄（1906-1991）。詩人。1950年代からハンセン病療養所の詩人たちと詩作を共にし、1953年には合同詩集として日本ライ･ニューエイジ詩集『いのちの芽』（三一書房）を編集・解説した。1991年に亡くなるまで、40年余にわたってハンセン病療養所の詩人たちと親交をもった。

(4)　山室静（1906-2000）。詩人。『近代文学』を主宰し、島比呂志の作品なども掲載。『高原』、『愛生』で創作（小説）や評論の選者も務めた。栗生楽泉園訪問を伝える文章に「ライ院訪問記」（『近代文学』第９巻第11号、近代文学社、1954年11月）がある。

(5)　コンスタンチン・トロチェフ（1928-2006）。亡命したロシア人貴族の両親のもと、神戸で出生。1946年栗生楽泉園入所。ロシア語、フランス語、英語、日本語を話したが、詩は日本語だけで書いた。詩集に『ぼくのロシア』（昭森社、1967年）、『うたのあしあと』（土曜日術社出版販売、1998年）がある。

ばあさんといっしょに住んでいたんです。ですから一歩入った家では、プーシキン全集とポタペンコ全集が置いてありました。ロシア文学は、ゴンチャロフまでしか認めないんですよ。

ゴンチャロフは私も読んだことがあります。面白いもんです。日本にも来たことがあるんです。『フリゲート・パルラダ』っていう旅行記を書いています。日本で川路聖謨（かわじとしあきら）と交渉した外交官ですね。川路聖謨とゴンチャロフは、通訳を介してお互いに認め合ってるんですよ。川路の日記にも出てきますし、ゴンチャロフの記録にも出てます。

おばあさんは、あとは認めないんですよ。「トルストイ？　あんな人が出たからロシアはアカになったんだ」って言うんですよ。ロシア正教をないがしろにした最初の文学者だって言うわけ。おばあさんは、トルストイの隣に住んでいたことがあるから、あんなやつは大嫌いだ。偽善者だということがわかっているって言うんですよ。びっくりしましたね。

そのおばあさんの話を聞いてみると、そのおばあさんは80歳を超えるまで生きていたんですが、80超えて、身振りの美しい人で、声も朗々としてるんです。１冊とって、プーシキンの朗読をしてくれましたが、私はロシア語がわからないんですが、見事な朗読でしたね。

彼女の話を聞くと、彼女はロシアの侯爵の生まれで、娘の時に、劇団で舞台に立ったこともある。やがてポーランドの伯爵と結婚したんです。ですから、プリンセスでカウンテス〔伯爵夫人〕ってわけですね。ロシアは、プリンセスの子どもはみなプリンセスなわけですから。

結婚した人は、第一次世界大戦、一次ですよ、戦争に行って戦死してしまうんです。彼女は非常に気落ちをして、ロシアの外に旅行に出ることを思い立って、中国、そして中国東北部、その頃の満州まで来たんです。その頃にロシアで革命が起こって、彼女の持っているルーブル紙幣は値打ちのないものになった。文無しで満州に、３人の小さな娘といっしょに向かった。

ハルピンにはロシア人がたくさんいましたから、ロシア語の新聞がいくらか出ています。日本から、松旭斎天勝（しょうきょくさいてんかつ）の手品が来ていることを知ったんです。手品のショーとして、自分を使ってくれないか、と言って、天勝に頼みに行くんです。ロシア人で大変美しい人ですから、天勝は、前座でちょっと出てもらうのはとてもいいでしょう、と、雇ったんです。天勝一座と一緒に日本に入ってきたんです。日本で非常に貧乏な暮らしをしているんです。

そのうちに、ロシアでは赤露軍と白露軍が闘っていますね。白露軍のほうに勇敢な侯爵がいて、巡洋艦をひとつ乗っ取って、九州の長崎まで入ってくるんです。その当時、大変なニュースだったんですね。それと、娘の１人が結婚しまして、息子が生まれた。だから、ロマノフ王朝の系図で言えば、息子もプリンスですね。

非常に貧乏な暮らしをしているので、そこで、ハンセン病にかかるのです。潜伏期間が長いですから、美少年のままずっと育っていくのです。

娘〔少年の母〕は大変な美人なんですよ。大正時代の日本というのは、普通には洋食を食べないですね。洋服っていうのは出てくるのですが、洋服の下に下着をどういうふうにして着るのか知らないんですよ。洋服を着て、どういうふうに歩いて、どういうふうに座るのか、知らない。それを教える人が必要なので、芝居だったらなんとか誤魔化せるのですが、映画を撮るとなると誤魔化せないでしょ。食べるときとか。座るときとか、立って歩くとか。そういうことを教えるための学校をつくったのです。

松竹では、新しい西洋流の身だしなみを身に付けなければいけないというので、演技部長のもとで教えたんですね。その１期生の中には、鈴木傳明（すずきでんめい）という、昭和の初めに大変名高い俳優もいました。

私は掘っ立て小屋の中で、その話を聞かされてびっくりしてね。私は、もともとその少年を連れていくきっかけをつくったけど、何にも知らなかったんですよ。うちへ帰ってすぐ、田中純一郎（たなかじゅんいちろう）の『日本映画発達史』（中央公論社、1957年）と

いう３巻ものの本があるので、ひっくり返してみたら、名前がちゃんと出てるんです[6]。そのおばあさんの言うことは、すべて真実だったんです。

そのおばあさんの娘は、日本の映画が始まった頃の主演女優なんですよ。２つ長編映画を撮っているんです。なぜ、今まで名前が知られていないかというと、関東大震災で２つともフィルムが焼けちゃったからなんです。残ってないんです。だが、正統的な映画発達史には名前が残っているんです。

おばあさんは、プリンセスでカウンテスですから、非常に誇りの高い人で、この話は外で言ってくれるなって私に釘を刺すんです。名前も出してくれるな。この家の父親は、自分の家の侯爵よりもっと身分が高いんです。ロマノフ王朝の皇帝に近いんですね。だから、さらに隠したいと言うんです。プライドがあるから、近所の人にも、自分はロマノフ王朝の侯爵家の生まれであるとか、この子は別の侯爵の息子であるとか、話をしないんですよ。

びっくりしましたね。いやあ、これには驚きました。

その夜、山室静と大江満雄と私を訪ねて、園長さんがやってきて、いっしょに飯を食べて夜遅くまで話をしたんです。そうしたら、〔鶴見は会場の壁を指さして〕そこに肖像画が出ています。矢嶋良一（やじまりょういち）という人です[7]。とてもざっくばらんな話をする人でね。この少年を引き取った過程について、話をしたんです。

検査をしたところ、おばあさんには、ハンセン病の菌は出ていなかったんです。だけど、少年１人を草津の療養所に放り込んだらどうなるかを考えて、自分〔矢嶋〕は母親も同病であるということにして、引き取って、ひとつの家を、その掘っ立て小屋なんですが、与えたというんです。

私は、その矢嶋さんの話にも感心しましたね。役人でしょ。役人にもこういう人がいるのかと思って。あっ、という感じでしたね。

その少年は、おばあさんと少年、という関係だけなんですよ。おばあさんから、ほとんど口移しで、ロシア語、それからロシアの貴族はみんなフランス語をしゃべりますからね、フランス語。それから英語。すべておばあさんから教えてもらったんです。読み書きをちゃんとできます。

それからその少年自身が近所の人と付き合いがなきゃいけないでしょ。その少年は付き合いの中から日本語の日常語を覚えたんです。いろんなお知らせなんかが来ますから、いくらか読み書きをできなきゃいけないから、それを覚えたんです。

その少年にとっては、ロシア語、フランス語、英語、日本語の順で覚えたんですね。彼はその最後の日本語で、詩を書き溜めてたんです。

３．母語でない言語で書かれた世界文学

私を草津へ連れて行った大江満雄さんは、非常に感動してね、彼は酒飲みなんだね。その掘っ立て小屋に行ったらとっておきのウォトカかなにかを飲ましてくれたんですよ。私は酒はぜんぜん飲めない。その80過ぎのばあさんは彼〔大江〕をものすごく歓迎して、抱擁してわあわあやってるんだ。

それは一時の感動じゃないので、東京に帰ってから、昭森社っていう彼の懇意な出版社と交渉して、その少年の詩集を出したんです。『ぼくのロシア』（昭森社、1967年）という詩集です。

それからさらに何十年も経って、第二詩集を出した。それは、『うたのあしあと』（土曜日術社出版販売、1998年）っていうんです。それから読んでみましょう[8]。

　　雪だるま

くるしい
ながい
ふゆ
まだ　つづく

(6)　田中純一郎『日本映画発達史Ⅰ　活動写真時代』（中公文庫、1975年）318-319頁、344頁に、キティ・スラヴィナ、エカテリナ・スラヴィナの記述が見える。エカテリナ・スラヴィナはトロチェフの母の本名。キティ・スラヴィナは芸名。

(7)　矢嶋良一（1905-1994）。医師。栗生楽泉園、多磨全生園の園長を歴任。講演会の会場となった多磨全生園コミュニティセンターには、歴代園長の肖像画が掲げられており、鶴見はその肖像画を指さして話をしている。

(8)　コンスタンチン・トロチェフ『うたのあしあと』（土曜日術社出版販売、1998年）17-18頁。

白い　しずかさと
うつくしさを
ダイヤ　の　ほし　みつめてる

だれか　つくった
かわいい
雪だるま
くろい　くちで　わらって
よろこんでる
まだ　つづく　ながい
ふゆに……

私は、ジョゼフ･コンラッドを思い出しました。

コンラッドはポーランド生まれなんです。両親が早く死んでしまったので、叔父さんに育てられたんですが、彼が生まれついた言葉は、ポーランド語、ロシア語。それから彼は、両親が死んでますから、自活しなくてはいけないので、船乗りになって、フランスの船に乗ったのです。そこで、フランス語を覚えたんです。やがてイギリスの船に乗り換えた。そこで英語を覚えたんです。最後の英語っていうのを、なんでか知らないけど気に入ったんですね。これで小説を書き始めた。40歳くらいになって船長をやめて､イギリスに降りて、英語で書いた小説を発表して、イギリスで死んだんです。

ケンブリッジ大学の英文学の教授で、Ｆ・Ｒ・リーヴィスっていう人がいるんですが、リーヴィスはとても厳しいんですね。始まりから英語で小説を書いた人で、その英語が読むに堪える人は、５人しかいない。強いて言えば５人半だ。その半人分を入れてどういう人かというとですね、ジェーン・オースティン、これ、女ですから、大学を出てません｡台所で書いてたんだから｡ジョージ・エリオット。男の名前ですが、女です。大学を出てません。ヘンリー・ジェームス。これはアメリカ人で、これも大学出てません。イギリスに渡ってきて、イギリスの国籍を取った人です。それから、ディケンズ。これは貧しいところから出てきた人で、議会〔法廷〕の速記者をやってた人です。これも大学を出てません。まあ、大学の反対演説をやってるみたいだけれども（笑)。このディケンズは半分認めるって言ってるんですけれども。もう一人はＤ・Ｈ・ローレンスです。ローレンスは大学を出てることは出てるんですが、これは炭鉱夫の息子で、自分の教授の細君と駆け落ちしちゃったんですよ。まあ、駆け落ちしても大学出は大学出かな。

リーヴィスはケンブリッジ大学の教授なんですけれども、イギリスの大学で教える学術語っていうのは、暮らしの言葉、生活語から人を引き離す、と考えるんですね。

日本ではそういう考えがないから、日本のノーベル賞作家は２人とも東大出てるんです。珍しいことです（笑)。

そして、コンラッド。40歳になってから英語で小説書き始めたので、コンラッドのもともとの英語っていうのは、文法上の間違いがとても多いんですよ。それから、しゃべるのは相当下手だったんです。彼は、大作家になったから、アメリカのイエール大学の英文学で自作の朗読をしたんですね。彼を呼んだ、ウィリアム・ライアン・フェルプスという英文学の教授が、こんなでっかい自叙伝を書いて、そこに１章費やして書いています。

「こんなに素晴らしい英語が、こんなにひどく読まれたのを聞いたことがない」っていうんです。もの凄いひどい発音で、これは40歳になってからでは直らないですよね。

グレタ・ガルボって知ってますか？　私の最も好きな女優の１人ですが、ガルボはスウェーデンのデパートの売り子だったんだ。それをスウェーデンの俳優がスカウトして、ハリウッドに来た。ハリウッドはサイレント映画でしょ。だから、ぐーっと世界のガルボになるんですけれども、途中、トーキーに代わるでしょ。トーキーになっても、ガルボは勉強家だから、ある程度聞いてわかる英語をしゃべれたんですよ。ほかの連中はだいたいつぶれちゃうんです。ポーラ･ネグリとかね。そういうのはみんなつぶれちゃう。世界を席巻したヴァレンティノだってつぶれちゃうでしょ。だけど、ガルボは残ったんです。だけど、英語はうまくないね。

「ニノチカ」（1939年）っていう映画があるんで

す。聞いてみると、「ニノチカ」は素晴らしいんですよ。「ニノチカ」は、監督〔エルンスト・ルビッチ〕もよかったんです。フランスから来たんですけれども。1936～37年当時のソビエト、ロシアがどういう国だったかをきちんととらえている珍しい映画なんです。ソビエトから派遣された先乗りが、どんどん堕落しちゃって、愉快な暮らしにおぼれちゃうんで、ソビエトは今度は女の偉い官僚を送るんです。それがガルボなんです。ガルボは英語がうまくないんです。だけど、うまくない英語がものすごく効果を発揮してる映画でね。あれは映画史に残るすばらしいものですね。

いま、コンラッドの話をしてるんだけれども。コンラッドの英語はその域に達しなかったんです。これは、イエール大学の英文学の教授が、自伝に書き残しているくらいまずかったんです。

４．交流（むすび）の家建設運動

大江満雄さんといっしょに訪問して以来、私は、この少年といくらかのつきあいが生じました。私は京都に住んでるんです。当時、新幹線はなくて、私は東京で仕事があると夜行で京都に帰って、講義をしてたんですよ。

あるとき、東京に出る用事があって、この少年に会う約束をしました。病気が進行して、もう片足を失ってたんですよ。だけど、勇気のある人で、バーンとバイクで東京までやってくるんですね。電話で、神田美土代町のYMCAに予約してあるから、そこの玄関で会おうということになった。

私が行くと、彼はYMCAから宿泊の予約を取り消されて、宿泊を断られているところだったんですよ。私は口添えをして、もう予約を受け入れてるじゃないか。この人は、園長から伝染しないという証明をちゃんともらっているのに。園長さんはその矢嶋さんです。泊めるのは当たり前じゃないかと言って。

ここはYMCAじゃないか。Young Men's Christian Association。これはクリスチャンです。泊められないなんていうんだったら、YMCAのＣだけ取っちゃって、YMAって看板を書き換えてくれって言ったんですよ。今日は、大学反対と、キリスト教反対みたいになっちゃうけどね（笑）。

なかなかそんなことじゃ説得に応じませんね。「ほかのお客が不愉快に思うからだめです」って言うんです。ほかのお客が不愉快に思うかどうかが基準になっている。

私は、夜行で京都に帰ることになっていて、こりゃ困ったことになったなと思った。東京に家を持ってないんだ。

しかし、この少年は機転の利く人なので、公衆電話から何度も電話をかけて、横浜にアメリカ人の経営している会員宿舎があって、そこに予約が取れたから大丈夫だと言ったので、そこで別れたんです。

夜行で京都に帰って、大学のゼミがあったので、そこでその話をしたんです。相当、憤慨が残っているのでね。こういうことがあったと。そこは同志社ですから、キリスト教の大学です。キリスト教も困るっていう話をしたんですよ。学生は20人以下だったかな。そのうちの１人がいまここに来てます。木村聖哉（きむらせいや）。私といっしょに本〔『「むすびの家」物語：ワークキャンプに賭けた青春群像』岩波書店、1997年〕を書いた人です。

それから数日たったら１人、柴地則之（しばじのりゆき）っていう学生が、１人で訪ねてきて、「そういう人が泊まれる家をつくりましょう。もう土地は予約してきました」っていうんですよ。

満20歳ですよ。ぜんぜん財閥の息子でもなんでもないんです。柘植（つげ）というところの旅館の息子ですね。本当にびっくりした。

そういうことに憤慨することは、進歩的知識人は誰でもできるでしょう。だけど、自分が働いているところで信頼されて、よし、それじゃあ土地を提供しようって、言ってもらえる人がどれだけいるんですかね。本当にびっくりしました。忘れることができません。

それで、家をつくり始めたんです。それが交流の家[9]なんです。つくっている途中で、もちろん

(9)　交流の家は、奈良市大倭にあるハンセン病回復者の宿泊施設。現在も、特定非営利活動法人むすびの家として活動を続けている。1963年ハンセン病回復者が宿泊施設の利用を拒否された事を知ったフレンズ国際労働キャンプ（FIWC）関西委員会のメンバーが呼びかけ、大倭紫陽花邑から土地の提供を受けて建設運動を進め、1967年に竣工した。

受け入れた組織側、その人は偉い人ですよ。矢追日聖[10]っていうんです。大倭っていう宗教施設です。

しかし、建設の途中で、近所の人たちが、学生を取り囲んじゃったんですよ。こういうのは困る、って言うわけですね。その時に学生側は、「皆さんの同意を得ないで、ここにハンセン病回復者の宿舎を建てることはしません」と言って、みんなの見ている前で、途中まで積んだブロックを、自分で壊しちゃったんです。それにびっくりしたんですね、囲んでいるほうは囲みを解いて。

学生はあきらめません。それから、学生には夏ごとに大きな時間がありますからね、三々五々、その反対している人たちの家を訪ねて行って。京大の医学部に西占〔貢〕[11]っていう教授がいたんです。それは、さっき大谷〔藤郎〕先生の紹介された小笠原登[12]の流れを汲んでいる人なんですね。その西占という人が書いてくれた、プロミン〔化学療法の治療薬〕が出来てからハンセン病は伝染しなくなったという内容の文章を持って、学生が三々五々、男女が組になって訪問するんですね。それを家で迎えた側も、学生の誠意っていうものを感じるんです。なんとなく軟化してきたという感触を得たときに、ババっと家を建てちゃったんですよ（笑）。建てちゃったら、近所の人たちも、壊してくれって、もういっぺん囲むことはしなかったんです。

ここには、理想主義だけではとらえられない、一種の知恵があります。これは、戦前はよく知りませんが、戦後の学生運動の中では珍しいやり方です。妨害があってこれは突破できないと知ったときに、じっとそこで座り込んで止まってしまう。あるいは後退もする。しかし目標からは目を離さない。これは実現できるという状況を見極めて、すっとそこまで達してしまうんです。驚くべき知恵ですよ。私が知恵をつけたんじゃありません。別に参謀はいたんです。とにかく素晴らしい学生たちですね。

その運動はけっこう知れ渡ってきたんですね。いまNews23〔TBSテレビ〕に出てる筑紫〔哲也〕っていうのは同じ組織にいたんですよ。関東のほうの組織の一員だったんです。関東のほうはどうしても理論が中心になるんです。だから「ハンセン病の差別はするな」って理論はやるんだけれども、関西のほうは、バッとそれだけのものをつくっちゃう。だからどうも気後れをしてね、しかし彼は朝日新聞に入ってから、ずいぶんいろんなところにニュースを届けてくれたんです。

藤楓協会[13]、ここ〔高松宮記念ハンセン病資料館〕もその傘下にありますが、理事長との話し合いとか、そういうものの斡旋にあたってくれたんですね。藤楓協会理事長と私は会ったんです。藤楓協会っていうのは皇族の支援を受けてるし、貞明皇后とかいろんな話があるでしょ。保守的な人だろうと思って、叱られるだろうと思って行ったんですよ。そしたら、「あなた方のやってくれてることは、とてもいい。いい学生たちだ」って言うんですよ。本当に裏表がないんです。喜色満面で好意的なんだ。びっくりしたね。

つまり、ハンセン病に長く関わってる人間は、当面はその時の国策と結びついた医学理論、これは間違った理論なんですが、それを受け入れているように見えても、当事者はわかってるんですよ。「ああ、藤楓協会ってそういうところなのか」とわかってびっくりしました。理事長はもう老人でしたがね。個人の思い出です。

5．移民が文化をつくる

交流の家が出来てから、トロチェフさんは何回も来ました。２つの詩集が出て、先ほどの「雪だ

（10） 矢追日聖（1911-1996）。宗教家。1945年大倭教を立教宣言。1947年奈良市大倭町に生活共同体大倭紫陽花邑を創設。1963年ハンセン病回復者の宿泊施設（交流の家）建設のために土地を提供し、学生たちの建設運動を支援した。

（11） 西占貢（1920-1985）。医師。京都大学皮膚病特別研究施設で、小笠原登の後を継いで２代目施設長を務めた。交流の家建設にあたっては、住民の反対に対し当時のハンセン病が治療可能であることなどの知識を伝える役割を果たした。

（12） 小笠原登（1888-1970）。医師。戦前より京都大学皮科特別研究室（後の皮膚病特別研究施設）でハンセン病外来診療を行う。ハンセン病の発病は体質を重視すべきことや不治ではないことを主張し、当時行われていた患者の強制隔離・断種に反対した。

（13） 1931年に設立され絶対隔離政策を推進する役割を担った財団法人癩予防協会を前身として、1952年に貞明皇后の遺金をもとに藤楓協会と改組された。2003年から財団法人ふれあい福祉協会と改称されて現在に至っている。本講演会が行われた時点では、高松宮記念ハンセン病資料館は藤楓協会が運営していた。

るま」という詩があるわけですね。これは日本語としたら非常に傍系のものと思われますか？

それはね、100年経ち、200年経ち、もうあと何年も経てば、日本語についての見方は変わってくると思いますよ。ハンセン病そのものについての偏見だって、90年経って、ついに国が動いたでしょう。

もともとすべての人間の文化は、移民の文化なんです。移民の文化以外に何もありません。言語もそのようにして出来ているんです。

日本語について、これを純粋化する。純粋な日本文化、純粋な日本語なんて言っているけれどね、この純粋化っていうのは、ひとつの政治的手段として国家が使っているだけなんですよ。国家が国民を陥れるための罠です。

日本には、万葉集の頃には、長編の歌がありました。残っていますね。明治国家が出来てから、長編詩というものは書かれなくなったんです。どういうわけで書かれなくなったか。いろいろ考えられるんですが、ひとつは、長編詩を書くだけの持続した感情を、日本国民が詩人として持ち得なくなったからです。だから途中でやめちゃうんです。

非常にすぐれたもので、ひとつだけあるんですが、『昔の家』（木犀社書院、1929年）っていう千家元麿（せんげもとまろ）が書いた詩ですが、これは古本屋でよく見ていたら、運がよければ出会うかもしれません。いい詩ですよ。彼は１冊分書いたんだけれども、未完成のまま終わってしまったんです。

だって、こんなに国策がくるくる変わって、国民感情が変わる国では、長編詩なんて書けますか？　そこに問題があるんです。

その中で、感情が持続する人もいるんです。その人たちは、書いた。その人たちは日本生まれの日本語育ちではありません。在日朝鮮人です。その長編詩を書いたのは、金時鐘（キム シジョン）です。２つ書いてます。ひとつは『新潟』（構造社、1970年）。もうひとつは『猪飼野詩集』（東京新聞出版局、1978年）。この２つです。

在日朝鮮人の数は、大きく見積もっても60万人以下でしょう。その中から、唯一の長編詩人が生まれた。日本語で。このことに注目してほしいんです。あまり注目されていないんですよ。日本の文壇というのは国民の文壇ですからね。大学も出てるし、と、ぜいぜい皮肉を言いたい（笑）。

６．大江満雄と『いのちの芽』の詩人たち

大江満雄さんのことをお話ししましたね。

ここに電車で来る途中、西武池袋線に東長崎っていう駅がありました。あそこに大江さんは住んでたんです。あの駅で降りて、訪ねて行ったことがあるんです。大江さんの机の上に、山と原稿が置かれていた。「何ですか？」って言うと、「これは全国のハンセン氏病の療養所から集まった詩だ。これを集めて、選をして、本にしたいと思っている。本の題名は決まっている。『いのちの芽』。自分の肉体は蝕まれても、そこにはいのちの芽が萌え出でる。そういう姿勢でつくりたい」ってね。

これを読ませてもらったんです。その中で、今も記憶の中に残っているものがあります。

谺雄二（こだまゆうじ）[14]っていう人が書いた詩。存命です。「鬼瓦よ」[15]っていう詩なんです。

鬼瓦よ
おまえをみていると僕は勇気がでる。

呪詛する勇気。
その中に微かな純血性がある。

これはすごい詩だと思いましたね。

呪いの「呪詛」。その中にこもっている「純血」。やわな理想主義じゃないでしょ？　やわなヒューマニズムではないでしょ？　ここには、闘う意思の持続っていうものがあるんです。

これが、ハンセン病療養所の中に、90年、あきらめることなく、ずーっと保たれていた感情のかたちですね。

もうひとつ、山と積まれた原稿のなかに、島比（しまひ）

（14）谺雄二（1932-2014）。1939年多磨全生園入所。1951年栗生楽泉園に転園。大江満雄編『いのちの芽』（三一書房、1953年）に参加。詩集『鬼の顔』（昭森社、1962年）、詩・写真『ライは長い旅だから』（趙根在との共著。皓星社、1981年）。このほか評論集や児童向けの作品がある。らい予防法違憲国家賠償請求訴訟の東日本原告団の代表、のちに全国原告団の代表を務めた。

（15）谺雄二「鬼瓦よ」（大江満雄編『いのちの芽』三一書房、1953年）194-195頁。

呂志[16]の詩がありました。この人も現存。

「ふるさとの家を思う」[17]っていう詩です。

ふるさとの家を思う日
わたしの心は暗い

わたしが癩になった日から
ふるさとの家は灯が消えた
暗い空洞のような家の中で
父は
いつまでも顔をあげず
母は
愚痴にあけくれ
妹は
嫁にゆけぬ青春をのろい
弟は
みんなの不安にうちしおれ
ふるさとの家は
笑いを忘れてしまった
死のような十年が過ぎ
わたしは新薬プロミンのことを知らせた

ふるさとの家は
十年ぶりに灯がついたようだと
父より便りが来た
しかし　その後一年
曲がった指が伸びたか
脱落した眉毛が生えたか
わたしは　なんと便りを書こうか
いま　やっと明るんだ
ふるさとの家の灯が
また　不安におののくのを感じる
うそを書こうか
真実を書こうか
ふるさとの家を思う日
わたしの心は暗い

一九五〇、七、二七

ここには日付があります。1950年７月27日。これは51年前に書かれた詩ですが、現在の状況をしっかりとらえているじゃないですか。いま我々の前にある状況って、こういうものなんですよ。

後遺症が残っている。言葉の発音なども含めて。それをどういうふうに迎えるところが、この日本にあるのか。そのふるさとは、どこにあるのか。〔元〕患者そのものの家の中に用意しつづけるのか、ないのか。いまの問題なんですね。その時、詩の持つ射程って非常に広いでしょう。

その山のような原稿の中に、もうひとつ、志樹逸馬[18]の詩があったんです。偶然、志樹逸馬と私とのあいだには、その後、文通が生じたので、私は長島愛生園まで、志樹さんに会いに行きました。志樹さんの家に上がって、お茶を供され、書いたものをいろいろ見せてもらったりした。

そこに〔会場の壁に〕、肖像画がある光田〔健輔〕[19]さんが生きておられて、患者の家に上がり込んでお茶を飲んだってものすごく叱られたのを覚えていますよ（笑）。光田さんは、伝染するという説によって療養所をつくった人で、それを訪問客によっておかされるのが相当に腹が立ったんだろうね（笑）。

志樹逸馬は小学校６年のときにここに、全生園〔全生病院〕に入ってきたんです。光田さんはその時からの志樹逸馬を愛し、よく世話をし、彼を非常に愛していたことが、光田さんの言動からわかるんです。志樹逸馬も光田さんを敬愛していました。

そのことは、光田さんが誤った医学の理論をつくったということによって消されるものではあり

（16）島比呂志（1918-2003）。1942年大島青松園入所。１年で退園。1947年再入所。翌年星塚敬愛園に転園。『いのちの芽』に参加。文芸同人誌『火山地帯』主宰。小説・評論を中心に著書は10冊を超える。らい予防法違憲国家賠償請求訴訟の最初の原告13人のうちの１人。1999年社会復帰。生前に詩集はなかったが、死後、立石富生編『凝視』（火山地帯社、2003年）、立石富生編『現代のヨブに』（火山地帯社、2019年）が編まれた。

（17）島比呂志「ふるさとの家を思う」（大江満雄編『いのちの芽』三一書房、1953年）165-166頁。

（18）志樹逸馬（1917-1959）。13歳でハンセン病を発症し1928年全生病院（のちの多磨全生園）に入院。1933年長島愛生園に転園。生前、詩集はなかったが、死後、原田憲雄･原田禹雄編『志樹逸馬詩集』（方向社、1960年）、『島の四季』（編集工房ノア、1984年）、若松英輔編『新編・志樹逸馬詩集』（亜紀書房、2020年）が編まれた。

（19）光田健輔（1876-1964）。医師。1898年東京市養育院に医師として勤務。ハンセン病患者の隔離病室「回春病院」を設け治療にあたる。1909年全生病院医長に着任。1914年院長となり、1931年長島愛生園の園長になった。ハンセン病の医療と隔離収容とは一体であるという考えを最後まで捨てず、日本の強制隔離政策を主導する位置にあり続けた。

ません。

志樹逸馬っていうのは、話してみると面白い人でしたね。小学校６年でここに入ってきたんですから。彼の全教養は、この療養所の中で得られたものなんですよ。それは日本の一般社会の中にいて、もっと高い学校に行って、彼の身についたものでしょうか。率直に言えば、身につかなかったと思いますね。知能の高い者ほど、国民の一部に溶け込み、国民の指導者になり、軍国主義の旗を振るものです。そうでない人は少ないです。

志樹逸馬の詩をひとつ読んでみましょう。「種子」[20] っていう詩です。

ひとにぎりの土さえあれば
生命はどこからでも芽を吹いた

――ここから、大江満雄は『いのちの芽』というタイトルをとってますね。大江満雄と志樹逸馬は、詩人として親縁関係にありますね。

悲しみの病床でも
よろこびの花畑でも
こぼれ落ちたところがふるさと

種子は
天地の約束されたことばの中に
ただ　みのる

汗や疲れをなつかしがらせるものよ
夢
黒土の汚れ
生きてさえおれば
花開く憧れをこそ持って来る

この詩風はどのように育ったか。

志樹さんによれば、小学校６年で入ってきて、勉強が好きだった。それから文学が好きだった。療養所の中に文学の先輩がいたっていうんですよ。それがいろいろ「こういう本を読め」って教えてくれた。その先輩は、自分の家族以上のものです。家族と縁を切っちゃったんですから。自分の学校の先生以上のものだった。そういう先輩と後輩のつながりというのは、非常に強いものとしてここに脈打っていた時代があるんですね。それが、大正昭和なんです。

志樹逸馬はそういう先輩の助言を得て、図書館に残っているタゴールの詩集を読んで魅せられたっていうんです。タゴールってインドの人ですが、大正時代に日本に来たことがあるんです。日本を訪れるまでは、雑誌や新聞なんかでも、前評判は非常に高かったんです。日本に来たあと、評判はがたっと落ちちゃったんですよ。なぜだと思いますか？

タゴールは日本に来て、大学で、これも大学だ（笑）、「日本は欧米に倣って帝国主義の道を歩んではならない」と演説をしたからです。大学は帝国主義の先兵として、大正昭和とずっと駆け抜けたでしょう。例外は１人や２人はいますよ。しかし例外について私は言いたくはない。文壇も、国民の一部として大政翼賛会の一部となり、文学報国会をつくる。

そこではタゴールがいいなんて言わなくなるのです。タゴールもガンジーもいけないんですよ。前評判は高かったけど、落ちちゃった。

だけど、そんなことは、ハンセン病療養所の中には、入ってこないんですよ。文壇がここへは入ってこないんですから。だから、図書館にある好きな本を、12歳からこっちの志樹逸馬は読んだ。それで、10代の少年として、詩風の影響を受けているんです。ですから、志樹逸馬の詩というのは、明治以来の新体詩からの流れを引いたものではないんです。世界の中の潮流で、特に訳を通してなんですけれども、タゴールですね。タゴールのすぐそばに、隣にいる詩なんですよ。それが、文壇に対して占める、ハンセン病療養所の特別な位置なんです。文壇の一部ではないんです。

国家が国民に対して、政府が国民に対して仕掛けた罠に落ちない珍しい場所だったんです。

もうひとつ読んでみましょう。「闇」[21] っていう詩です。

（20）志樹逸馬「種子」（原田憲雄・原田禹雄編『志樹逸馬詩集』方向社、1960年）15頁。
（21）志樹逸馬「闇」（原田憲雄・原田禹雄編『志樹逸馬詩集』方向社、1960年）16頁。

闇の中にも目をひらいていたいと思う
人はたいてい
目をつむる
眠る

だが
このしずけさの中にこそある
闇の声に
わたしは耳をすましたい

むしろこういう詩から、大江満雄は、療養所の外にいて、影響を受けていますね。

7．転向研究への示唆

戦後、ことに終戦直後は、朝鮮戦争〔1950～1953年〕というものがあって、中国と北朝鮮とがアメリカに対抗したので、日本はアメリカに肩入れして、日本の経済の復興を呼び覚ましたんですね。これが戦後の高度成長と、オリンピック〔1964年〕と、そのあとにつづけて、大阪で万国博覧会〔1970年〕。そのあと突っ走っていくバブルの時代になるんです。

この万国博覧会のときに、規模はその何万分の一に過ぎないのですが、大阪の公園で、反戦万博というのをやったことがあります。戦争反対というものを中心とする催しなんです。その頃はベトナム戦争というものがありますからね。そこに行きますと、いろんな反戦団体が展示を出してます。その中に、小さい展示で、山行きのテントがひとつ張ってあって、そのテントの外側に、よく見ると、葉書がべったり、ずーっと貼ってあるんです。

たくさん人がかたまっているわけじゃなくて、テントの前に、二十歳そこそこの青年が、ただ座ってるんですよ。きわめておだやかな顔をした二十歳くらいの青年で、「この葉書、なんですか？」と聞くと、「これは、ハンセン病の療養所で、閉じ込められていて、家族からも切り離され、名前も変えてそこにいる人たちが、それでもわずかな通路で、ふるさとへの思いをつづった葉書なんです。答えが返ってくると集めてきて、それをこのテントの外側にペタペタ貼ったんです」と言うんですよ。

この青年は、京大医学部の１年生。さっきの交流の家をつくる運動の末端にいる若い学生ですね。彼は、10代の頃に少年として培った３つのことを実現したんです。

１つは、少年の頃好きだった女性と結婚した。これ、なかなかできることじゃないですよ。大変なことです。女性はその後、看護婦になって、彼を助けた。

その少年は、ふるさとの遊び友達を大切にして、京大に行っても縁が切れないように非常に注意していた。その仲間とふるさとに戻って何かやりたいという考えを持っていて、共同体ですね。その家をつくりたい。交流の家を奈良につくったのと同じように。それで彼はつくった。

次に、彼の生まれ育った鳥取県について、何人がハンセン病で隔離されて園にいるかを調べた。それについての事情を聞いて、１冊本をつくった。それは『隔離』〔徳永進『隔離：らいを病んだ故郷の人たち』ゆみる出版、1982年〕っていう本です。

彼がつくった家は「こぶし館」っていうんですけれども、そこで講演会を開くときには、園からそこに人が来て、話を聞き、討論に参加し、泊まれるようにした。

そこで私が初めて会った人がいるんです(22)。私にとってはそんなに昔のことじゃないんですけれども。その人の詩をあとで読んだんです。

島田等(23)「非転向」(24)っていう題なんです。転向しない。

望月を過ぎても
月は明るかった

(22) こぶし館の設立が1989年なので、鶴見と島田の初対面もそれ以降ということになる。

(23) 島田等（1926-1995）。1947年長島愛生園入所。1964年「らい詩人集団」結成。詩集に『返礼』（私家版、1992年）、『次の冬』（論楽社、1994年）。評論集に『病棄て』（ゆみる出版、1985年）がある。

(24) 島田等「非転向」（『次の冬』論楽社、1994年）113-114頁。

待つことの痛みが、こんなにも
汗をかかせる
感じさせる

愛する人から
愛されても理解されることのないかなしみは
私が選んだものだ

一人なら
孤独もない

生きつくし
生きつくしても
私を許さない私であり
私を貪りつづける私である

眠ろう
月は惜しいが
眠ってこそ夢を見る

私は、もはや79歳ですから、あと生きて、どれほどの自分の仕事があるかわからないんですが、いままでの79年を考えると、いちばん大きい仕事は、転向についての共同研究をしたことなんです〔思想の科学研究会編『共同研究　転向』全３巻、平凡社、1959-1962年〕。それは、国家が個人の思想を圧し潰す、そのプロセスの事例をずっと集めて、出したことがあるんです。ですから、転向の研究ですね。

それは、戦争中、1943年の２月にパッとひらめいたもので、だいたいそれが持続して、今日までやってきてるんです。

それと並行して、まったく違う、ことに好景気とバブルのなかで、日本の国民の理想はふやけてるでしょう。そのことについて、はっきり標準を定めて、この詩は書かれていますね。

ですから、私個人がした仕事に対して、非常に強い刺激を、まったく違うところから与えている。私を、研究者としての領域において叱咤鼓舞する仕事〔詩〕なんです。そういうものですね。

８．大江満雄の戦中・戦後を貫くもの

戦争の話を今までいくらかはしてきましたが、大江満雄という人は、戦争中いったい何をしたのか。彼は、昭和の初めのプロレタリア詩人です。

日本文学報国会の命令で、『辻詩集』（八紘社杉山書店、1943年）に書けって言われたときに、一篇書いてるんですよ。それは、街角のいろんなところに貼り出す短い詩なんです。

大江さんは、日本文学報国会の、つまり国民の一員として、彼はこれを書いたんです。どういう詩かというと、「四方海」[25] という詩なんです。四方（よも）の海ですね。

日本列島は不滅の巨艦
この巨艦を護る
艦船のあまた

――こう見るとなんとなく、戦争万歳みたいでしょ？

洋上にものを運ぶ　かの大小の船
きのふ海戦に勝てど
けふ我が方も撃沈されるとおもへ

かの渺渺たる海
おもひ見よ
機械と機械との戦ひ。

私はこれ、すごい詩だと思いますよ。

「いざ来いミニッツ、マッカーサー」とか、「鬼畜米英撃滅」とか書いてないんです。「出てくりゃ地獄へ逆落とし」なんて言っておきながら、来たら、「おお！　マッカーサー様、ミニッツ様」とか、そういう詩を書くんだからなあ。国会人と、文壇人はあまり信用できませんな。大学人も。そうすると、日本のなかで信用できるのは、ほとんどないじゃないですか（笑）。それが問題なんです。

かの渺渺たる海
おもひ見よ

（25）大江満雄「四方海」（日本文学報国会編『辻詩集』八紘社杉山書店、1943年）78-79頁。

機械と機械との戦ひ。

このイメージの使い方ですね。

大江さんは、敗戦後に『亜細亜詩人』〔1953年創刊〕っていう雑誌をつくったんですよ。さっきの山室静もそこへ入っていたんです。

大江さんの考えは、大江さんのその時の言葉でいうと、「アジアを結ぶものはらいだ」というものです。

ハンセン病っていうものはネガティブなものとして考えられているでしょう。しかし、この絆がアジアを結ぶ。共同でこの問題を解こうとする姿勢を、大江さんは持っている。だから、大江さんは、ハンセン病の問題に突っ込んでいったんです。それが『亜細亜詩人』という雑誌の題名にもあらわれています。

交流の家の命名にも、大江さんは関わっています。

ですから、ネガティブな絆は重大なんです。同じ病気を持っているという絆が、我々を結ぶ。

戦争中に大江さんが『辻詩集』として出した「四方海」は、戦後に大江さんが出した『亜細亜詩人』の理念と、非常に響きあうところがありますね。

そして、高度成長からバブル、その自己中心的考えが、盛んになんていくなかで、大江さんは、自己中心はいけない、っていうことを決して言わないんです。

「エゴの木」(26) っていう詩を書きます。

ぼくは思った
心のうちにしているぼくのエゴの木が燃え
隣人のエゴの木が燃え
次々無数のエゴの木が燃えひろがる

これはエゴの山火事だ
エゴの木の自己革命か
強風が吹いて火勢はすさまじくなる

これ、「エゴの木」といって、大江さんが死ぬ直前に書いた詩ですね。エゴの木が燃えることで何かがあらわれることがあるっていうことです。

今からひと月ちょっと前、韓国から金芝河（キムジハ）という詩人が訪ねて来て、私をご馳走してくれたんですよ。京都の餅料理。京都にいて京都料理をご馳走してもらうなんて変なもんですがね。その時は、４月の14日だったかな。

「いま韓国では、日本の教科書に対する批判が非常に高まっていて、なかなかこれは消えそうにない。だけど、ひとつこういうことが起こった。フィリピンでもシンガポールでも、もちろん中国でも、日本の教科書についての情報が伝わって、教科書批判の運動が起こって、お互いに情報を交換する動きが出てきた。これには未来がある」と、金芝河は言うんです。

この時私は、大東亜共栄圏というものを思い出したんですよ。大東亜共栄圏っていうのは、日本国の、日本政府が中心になって、アジアの国々を引っ張っていくという思想なんです。

日本という国が台湾と朝鮮とを取っちゃって、植民地にして大東亜共栄圏をつくるって、この「共栄」っていう考えがもともとどうかしてますよね。そういうことを日本国は平気でやるんです。それを日本国民は平気で支持するんです。闇の中に目を開いてないからです。

この日本の教科書批判の連帯は、日本政府が引っ張っているんじゃないです。まったく別の、大東亜共栄圏の芽を持っていると、私は思います。

この考え方は、大江さんが敗戦後に、『亜細亜詩人』という考え方を込め、学生がつくってる奈良の家に交流の家とchristenした〔命名した〕ということに、意味があるように思いますね。

今日は私が出会ったことをひとつひとつお話ししてきました。つまり私は、ハンセン病隔離はけしからんという大きな前提からずっと運動を始めた者ではないんですよ。なんとなく巻き込まれてきちゃったんだ。

ほぼ私の考え方はそこで終わりなんですが、もうひとつ。

(26) 大江満雄は、晩年、「エゴの木」を主題にくり返し詩を書いた。初出は、「エゴの木」（『キリスト新聞』キリスト新聞社、1978年１月１日）。次いで「エゴの木」（『詩学』第34巻第４号、詩学社、1979年３月）。鶴見がここで朗読しているのは「夢の中で人間のエゴの木が燃える時」（『木馬』第８号、四国学院大学、1979年７月５日）である。

９．自分の問題から解く

トロチェフの、その少年の家に入ると、そこは帝政ロシアだった。すでにニコライ皇帝が死んでから、40年、50年、60年、70年経っても、そこにロシアの文化があった。そこでは、ソビエトロシアがけしからん、トルストイまでさかのぼって叩くんですから。ずいぶん時代錯誤の考えだなと、日本の大学出の人たちは思うでしょう（笑）。

意外にそうではないんですよ。

私は、14歳くらいの時に、ある日、新聞を開けてみたら、大学助教授がヨーロッパから帰ってきて、日本に上陸してすぐに捕まったって書いてあるんです。名前は、高橋正雄（たかはしまさお）。人民戦線の系統ですね。山川菊栄（やまかわきくえ）の系統。「はあ」と思ったんです。その後、この人は戦中に、日本のアジア侵略万歳！なんてことを全然書いてないんです。戦後生きてて、「あ、まだ生きてるのか」と思ったら、極めて穏健な社会主義を代表する経済学者として、社会党の隅に名を置き、社会党の運動のなかでも、割合軽んじられる論客として90歳超えて生きていた。

その人に私は偶然、九州で会って、とても感心したんです。元気だった。階段なんか昇るのに、すたすた自分で昇るんですよ。ある時、私といっしょにエレベーターに乗ったから、「先生でもエレベーターに乗るんですね」って言ったら、「若い人と一緒の時には」って言ったんだ（笑）。まったくびっくりしたな。

彼の説は、「ロマノフ王朝が残って、ウィッテなんかの改革路線を活用していったら、そこからは必ず別の社会主義があらわれる。そして、ロシアにはもっと健全な時代が来ただろう」。

それが彼の持説なんですよ。その話を聞いて、一緒に中国に行った丸山眞男（まるやままさお）がびっくりしてた。穏やかな改革路線。そういう道はあるんです。

つまり、ロシアの問題は深刻です。それに対抗するには、「レーニンだけがただひとつの世界史のとらえ方だ、これがまだわからんのか」と言ってポカポカと、大変な数の人間がぶっ殺されたでしょう。あれが駄目だとなると、今度は資本主義がいいだなんて。

ロシアの問題は深刻です。問題はあるんですよ、そこに。問題に背を向けない。そこから考えていく。

今までの転向史、非転向論というのは、ことに非転向の立場を貫けと言ってるのは、ソビエトロシアの政府の世界把握を、一条たりとも惑わずに呑めってことなんですよ。そうでないやつは、理由を付けて殺しちゃったりすることを、ソビエトの中でも外でもやってきたんだ。今も。

手本を、ある政府のテーゼに求めるのではなく、問題に求めたらどうですか。人間には深い問題があるのです。これに目を背けることなく、問題の解き方を考えていく。この一つの解き方だけが解き方だと言えるんでしょうか。そのような、問題に背を向けないという非転向の道は、またありうる。

ハンセン病療養所のなかで、志樹逸馬が穏健な仕方で解き、島田等がもっと根本的な、ラディカルな仕方で解いたのは、そういう問題の解き方で、いずれの仮説の出し方も、問題に背を向けないということでは同じなんです。問題というのは、ハンセン病に、そこでとらえられている自分が問題なんですから。

ですから、転向・非転向の概念を、そのように変えていく、革命的な考え方の転回のきざしはここにありますね。そのことを私は教えられました。

日本の学会は、これだけたくさん大学があるんですが、目覚めていませんね。それが、私の話。終わります。（拍手）

質疑応答

質問者１　どうしてもわからない点が１点あるんですね。それは何かというと、ほかの先進国に比べて、日本だけが特別遅れちゃったわけです。1996年になるまで、隔離をやめることができなかったわけですね。それがなぜかっていうことが、どうしてもわからないんですね。

先生のお話をうかがっていると、光田健輔も決して悪い人ではなかったと。藤楓協会の理事長も決して悪い人ではなかったと。そういう状況にありながら、なぜやめることができなかったのか。

1953年に、らい予防法を廃止しようじゃないかという動きがあったと覚えているのですけれど

も。ここ全生園からデモ隊が行って途中で止められちゃったということがあったと思うのですが、あの時に厚生省が、こともあろうに、なぜ廃止しないかというと、いま〔入所者が療養所の外へ〕出されたらかわいそうじゃないかと。そんなことをするくらいだったら隔離するほうがましだということを言うわけですよね。それに対して日本人というのはそんなに奇異に思わないわけです。そのへんがどうしても不可解なんです。

例えば、中国残留孤児の問題でもそうなんですけれども、かわいそうだからほっとく、無視しちゃうわけなんですね。モダニスティックに解決しようという意思がどこからも出てこないんですね。それは世界において、日本が特殊な状況じゃないかと思うんですよ。

実際、鶴見先生も知識人として、1953年のらい予防法闘争のことはよくご存じだったはずです。しかし、何らかの運動が起きなかったということが、もうちょっとわからないことですし、先ほどの先生の言葉を使えば、どうして日本人の国民は、闇の中に目が開かないのか。どうしてもわからない。先生が言うように、国家が悪の主体であるとはぼくにはどうしても思えないんですね。共犯関係にあるような気がしてならないんです。どうして、特殊な精神状況を持ってしまったのかということをお聞きしたいです。

鶴見　「共犯関係」っていうのに、私は同感です。「共犯関係」なんです。それがいつ始まったかっていうと、私の考えでは、1905年が起点だと思います。

黒船が来たのが1853年ですが、それから1905年まで、じつによくやったと思うんですよ。政府の指導者も、1905年で力尽きて倒れたんです。

戦争をやりたくないっていうのが伊藤博文なんかの考え方なんですが、やると決めても金がないでしょ。金を集めるのに国債を買ってくれって回るんだけれども、売れないんですよ。

偶然、ユダヤ人のジェイコブ・シフっていう人物が日本の国債を買い始めて、ユダヤ人は非常に長い間の迫害の歴史を持ってますから。これが買いの運動の歴史を起こして、金がある程度できた。

だから、満州派遣軍の総司令官の大山巌は、うちに戻ってから、「シフさんの恩義を我々は忘れまい」って言ったんです。

その後、大正から昭和に入ると、四王天延孝・陸軍中将がさかんに「ユダヤ人が世界の陰謀だ」と言って、軍国主義へ持っていくでしょ。

ユダヤ人によってかろうじて、日露戦争は負けないで済んだんですよ。あれ、負けないで済んだだけなんです。その歴史的事実を、あのへんで歪曲するんです。負けないで済んだっていうことを嘘をつくから、嘘のつき始めは、1905年なんです。だから、国民運動が起こるんだ。最初の国民運動が。日比谷で起こって、交番やなんか焼いちゃうんです。その多くは、「もっと戦争をつづけろ！」「賠償金の金をもっととれ！」

もっとつづけたらどうなると思いますか？　日本は負けます。日本を取られちゃうかもしれません。

あの時から現実認識を失うということは、それは無理はないでしょう。長い犠牲を強いられた国民ということを考えたら。そこから起こって、政府指導者が、それに迎合したんです。ですから、日本はもはや世界の先進国になったという嘘は、そこから起こった。

大正時代になると、私の子どものころは、世界の五大先進国。それから三大国になって、最後、昭和の半ばになりますと、アメリカと覇を争う。まったく現実離れしたじゃないですか。

アメリカからくず鉄買って軍艦つくってるんですよ。それで最後は「神風が吹く」。

だから、国民と国家の共犯です。国家の指導者が、国民に迎合するんですよ。票が取れるから。今もつづいてるでしょう。

敗戦といえども、この共犯関係の絆を断ち切ることはできなかった。マッカーサー、マッカーサーって言いますけれども、マッカーサーは雇われマダムですよ。最後はクビになったじゃないですか。マッカーサーはそれをわかっています。

この占領の費用をなるべく安く上げないといけないと思った。当然でしょう。高くするとクビ切られるからです。そのためには、３つのアメリカにないものを活用しようと考えた。１つは天皇で

す。もう１つは文部省です。文部省ってアメリカにないんですよ。もう１つは東大です。東大っていうのはアメリカにはないんですよ。そのことが官僚にはわかってないんですよ。東大教授にもわかっていないんです。戦前は東大が一流大学だって、それも疑わしいと思うんだけど。戦後、負けたから今度はハーバードのほうが一流になったから、東大から留学してハーバードに行って、１年ぐらいいて帰ってくるんです。

官僚もそうですよ。大蔵省に入ってから、大蔵省の金でハーバードに１年留学してまた帰ってくるんです。ハーバードをアメリカの東大だと思ってるんです。ハーバードはアメリカの東大じゃありません。ハーバード出の大統領なんて、20世紀に入ってからほとんどいませんよ。戦後はケネディ、20世紀に入ってからだと、フランクリン・デラノ・ルーズベルトと、セオドア・ルーズベルト。

だいたいハーバード出の政治家っていうのは嫌われるんですよ。なぜかと言うと、言葉が違うからです。ちょっと言葉が違うんですよ。英語で言うと、例えばね、居抜きのそのへんの大学出た人間だと、「ボストン」って言わないんです。「ボーストン」って言うんです。「ボ」を長くするんですよ。それでわかっちゃうんです。「ボストン」というやつは、東部の居抜きの学生じゃないんですよ。ちょっと、３分聞いただけでわかるね。ですから、あんまり選挙に勝つ奴はいないんです。ケネディは偶然。カトリックであり、ハーバード出てるという２つのハンデキャップを克服した珍しい人です（笑）。

だけど、私は東大教授を前に、「東大教授はくだらない」「頭の中に脳みそじゃなくて豆腐が入っている」と言う。すると、その東大教授が、「どうしてそんなに東大教授を馬鹿にするんですか。あなたがそんなに馬鹿にするのは、あなたがハーバード出てるからじゃないんですか」って言うんだよ。そうじゃないんだ。アメリカの歴史っていうものを知らないからなんですよ。

日本だと、東大出の総理大臣がいちばん多いです。その次が、陸軍大学校です。その次が海軍大学校です。いま、少しは変わってきましたが。

私は関係ないんだが、肩入れしている日本共産党は、日本に数ある政党のなかで、ただひとつ、東大を信仰してる政党なんですよ（笑）。あれ、東大出じゃないと認めませんよ。ああいうことになってるから、日本の進歩思想はあんまり期待できないね（笑）。

国民思想っていうのが、また、日露戦争以来ずーっとあって、マッカーサーもその絆を断つことができなかったんですから、どうなるんでしょうね。

もともと、らい予防法〔1907年癩予防ニ関スル件〕をつくる背景にあったのは、先進国として、先進国じゃないんだけれども、かっこうが悪いから。外国人が来た時に、熊本の神社なんかにずーっと患者がいるっていうのは体面が悪いから、ひとところに閉じ込めたい。

「先進国」という、この前提が間違っています。この前提を、外国に行ってきたような国家の高等官僚が考え、国民が支持した。ここに共犯関係があります。これが、敗戦によっても絶たれなかったというのが問題なんです。

先進国っていうのは、金を持ってる持ってないじゃなくてね、まっとうなことをやってるかどうか。犯罪で考えたらどうですか。アメリカは犯罪の先進国ですよ。日本もだんだんアメリカに似て来て、犯罪先進国になってきたんですよ。戦前にはちょっと考えられないような犯罪が、次から次へと起こるでしょ。犯罪でアメリカを追っかけてるから、日本は２位、こういうふうに考えるならわかりますよ。

しかし、どうしたら、いい意味で、日本人の未来を見つけることができるでしょう。私は、大江満雄の『亜細亜詩人』。それから金芝河が言ったような、教科書批判の連帯。それに日本人が耳を傾ける。

日本人ですよ、国民じゃないですよ。日本国民がみんな耳を傾けるとは思えないね。この場にいる人たちは、日本国民の代表ですか？　私はそう思いません。日本国民だったら私は確実に袋叩きにあってるはずです。不敬なことばっかり言ってるんだから。文部省は殴るし、東大は馬鹿にするし。

皆さんは日本人なんですよ。日本に住んでる人間なんです。日本国民が、日本に住んでる人間になる道は遠いです。それを今まで引っ張ってきたのは、今も引っ張っているのは、今もハンセン病療養所にいる人たちだと思います。私は、そう信じてるんです。だから、このことを55年やってるんです。誰に頼まれたのではありません。きっかけは、前に言った、リトアニア人の医者からかかってきたひとつの電話に過ぎません。

この、ロシア人の家族に会ってから、とんでもない理想を、50年、60年、70年と、保って生きてるなと思ったけれども、高橋正雄という個人に立ってみると、それも、ロシアの問題に直面する仮説のひとつとして考える。これは、世界の法則から外れてるとして、考えないことにしちゃいけないんだというふうに、悟るようになったんです。

だから、この話は、ハンセン病者は、かわいそうだという話ではなくて、ハンセン病者から教えられたという、私個人の思い出なんです。それは、日本社会の歴史とまったく切り離された特別なところにある話ではありません。

皆さんはおそらく、日本国家のまったくの典型的なサンプルではないでしょう。だから、我慢して座って、私の話を最後まで聞いてくださったんです（笑）。（拍手）

質問者２　今日は心に沁みる話をありがとうございました。私、東村山市内から参加しております。質問に入る前に、個人的なことを申し上げますと、30年は経っていないかもわかりませんけれど、草津の楽泉園に行ったことがあるんですね。たまたま知り合いの看護婦が勤めていまして、そういう関わりがあって、楽泉園に行ったという経過があるんです。その時に、たまたまカトリックの方だったものですから、丘の上にある教会に入ったことがあるんです。その時に、看護婦さんが、「ハンセン病は感染しませんよ」と言われたことがあって、またそのあと、その看護婦さんの寮のほうに行ったことがあって、監獄〔重監房〕があった跡地も案内された、そういう経験があったんです。

ぼく自身、ハンセン病に対して認識がなかったということもあって、今回、政府が控訴しなかったということについて喜んでいるんですけれども。全生園にも初めて商工祭りに参加して、この中を自転車でぐるっと回ったんですけれど、お寺から郵便局から全部あって、ここは隔離されて一生を送る場所だとはっきり感じたんですね。そういう個人的なことをまず申し上げたいと思うんですけれども。

今回、控訴をしないということを政府が決定をしたということがありますけれども、その同時期に、外国人の選挙権の問題があったと思うんですね。これが与党の反対で見送られたということで、私は非常に複雑な思いがしたんですね。ハンセン病の問題と在日外国人の選挙権の問題とは関係あると思うのですけれど。

私は教育に関わっていて、教科書問題で、昨日、市民センターのほうで、在日韓国人の方から生活史を含めて、お話を聞いたっていう経過があります。このハンセン病の方のなかにも、在日朝鮮人の方がいらっしゃるということを聞いてるんですが、そのへんのことに関して、鶴見先生のお考えがありましたらぜひとも聞かせていただきたいと思います。

鶴見　最後のことからお答えしましょう。回復者のホームをつくる運動をやっていた学生のグループは、FIWC っていうんですけれども、フレンズ。つまりクウェイカーの運動から引っ張ってきたものなんですよ。

これは、韓国人の問題を非常に早くから取り上げて、今も、韓国に行って韓国のハンセン病者のための家を建てたりする仕事の手伝いをずっとつづけています。

また、このハンセン病療養所の中に韓国人もとても多いんですが、そういう問題は残っています。

もともと、日本人だからもっと親切に扱わなくてはいけないっていう考え方があって、90年間隔離されたんですから。しかも自分の子どもであっても父親であっても関係を切っちゃうんですから。日本人だから、っていうのは、このハンセン病に対する差別に対して強い力を働いてきたとは思えないんですが、もともとこの日本の土地に生まれて住んでいる人間は、誰でもいっしょにって

いうのが、当然の法であるべきでしょう。そういう法をつくろうっていう考え方は、1945年の敗戦の時にあったんですよ。その時、憲法の元型（もとかた）を書いた、制定委員会の最年少のメンバー、ベアテ・シロタですが、私より１つ若い22歳だったんです。彼女は、「All natural persons は、差別されるべきではない」。人間として生まれたすべてのものは。この日本の土地でですよ。つまり原案は、委員長だったケーヴィスが……。ベアテ・シロタもケーヴィスも２人ともユダヤ人です。ユダヤ人の迫害というものを身に染みて感じて、憲法の条文をつくってるんですが、ケーヴィスは、Law school、法律学校を出ている秀才なので、日本の世間というものに遠慮して、同じユダヤ人のシロタのつくった条項を消したんです。シロタはその証言をずっとしてます。ケーヴィスは死にましたが、シロタはまだ生きてますから。

私は、もし憲法を直すとすれば、「All natural persons」に変えるべきだと思いますね。今は、護憲か改悪かだから、私は護憲のほうに一票を投じますよ。だけど、直すべきところはそこにあるんです。

つまり、どうしたら日本の国民が人間になるかっていう問題なんですよ。結局、90年に及ぶハンセン病に対する差別もそこに根差してるんです。日本の国民が人間になる道は遠いです。そんなことは、国会議員の念頭にも浮かびません。大学出てるから、大学で習ったことは覚えてますよ。「人権は大切だ」。そのくらいのことは国会議員は知ってるでしょう。二世三世で裕福に育ってる人が大部分なんですから。しかし、「All natural persons」っていうグッという力は出てこないですね。思想がないからです。

私は自分の偏見をはっきり言うとすれば、国会議員だけ、海外渡航をやめたらどうかと思ってるんですよ。税金の無駄だから。だって、何にも学ぶ心構えがないもの。やめたほうがいいですよ。外交官にもやめてくれ、っていうのは、これ、いろんな仕事があるから仕方がないけれどもね。国会議員についてはやめる。金たくさん持ってるんだから、自分で行けばいいじゃないですか。

私はそういう偏見によって生きてるんです（笑）。よく殺されないで生きてるなと思いますよ。感謝してます。

私の友人は、このハンセン病療養所の中にいるんです。それはこの55年の私の感じです。私の友人の中には、大江満雄があり、トロチェフがあり、志樹逸馬あり、島田等あり。私のゼミの優れた学生の柴地則之、そういう人が、この50年、私を引っ張って啓発してくれた人なんです。

だから、みなさんはその友人なんだから、国民とは一味違った人たちであろうと、私は期待してるんです。（拍手）

質問者３　先生、今日はありがとうございます。さっきの「共犯関係」を断ち切るということについてお聞きしたいのですが、今のお話を聞きまして、それでいいんだろうと思うんですが、理解が間違っていたらいけないので確認のために質問させていただきます。

私は、母と父から生まれてきまして、息子がいるのですが、その母を母と思い、父を父と思い、子を子と思うところからものを発想するっていうか、ものの根源を考える。そういうことを我々が反省しながら見直すということでよろしいんでしょうか。

先ほどの、アジアのグループの方々とか、反教科書運動の今までと違う流れについて、先生が感じておられる内容なんですが。

鶴見　「全人類が」、っていうところから考えたり話をしたりするのは、私は好きじゃないんですよ。だから、自分の父親との関係、母親との関係、そういうことから考えたいですね。

私の母親っていうのは、ものすごい厳しい人だったので、２つ３つの時に、私がこっそりお菓子を盗む。母親から見れば、それは犯罪行為ですね。「あなたは悪い子だから、あなたを殺して私も死にます」って言うんですよ（笑）。そういう強迫にあって、ゼロ歳のときからずーっと生きてるっていうのはつらいですよ。だから、私の原哲学はね、「正義っていうのはハタ迷惑だな」（笑）。だから、自分が正義の人になりたくないんですよ。

だから今の話も、どうして私が、トロチェフと

いうハンセン病の人と巡り会ったか、どうして大江満雄に草津に連れて行かれてトロチェフと再会したか、という話なので、私は「正義はこうだ」っていうのはゼロ歳の時からもう懲りてるんだよね。だから私は「女なんか」なんて言葉は腹の中から出てこないんだよ。「女は怖い」と思ってるから（笑）。

国会議員に対しては非常な偏見を持ってますが、それは私の親父が国会議員で大臣だったからなんです。だから、そういうものに対して強い強い偏見を持ってるんです。しかも東大で１番だったんですよ。これも嫌いなんです。あらゆる１番は嫌いだ（笑）。学校の成績のいいやつも嫌いだ。そういう基本の考えがあるんですね。学校に入ると、「ニセ問題」を解くことが上手になるんですよ。自分の問題を前に置くことができなくなっちゃうんです。だから日本のように学校が発達すると困るんですよ。

志樹逸馬みたいに偉大な人間は、学校と離れたところで、ここで育ってきたでしょう。このハンセン病療養所の歴史っていうのは、いろんな仕方で考え直していくと、教育制度としても文学としても政治としても、重要な場所だったことがわかります。だいたい外の日本の社会で平和主義っていうものが衰えていくなかで、長島愛生園では社共共闘政権があったんですよ。そういうところを見ていくと、療養所内部のいろんな伝承というのは、語りつくせない、重大な国民批判の原点なんですよ。

日本が一等国に引き上げられたっていうのは、国民が金を持ってきたから言うんであって、金持ちが偉いということと同じじゃないですか。アメリカが金持ってるから偉いっていう、その程度の考え方が、重大な思想でしょうか。私は自分の偏見を以って対抗したい。（拍手）

質問者４　確認ですが、お話の中に出た、金時鐘という人の詩集は、『新潟』と『猪飼野』ですか？

金時鐘という人の詩集は、今も手に入るのでしょうか。ということと、トロチェフという人の詩集は、昭森社でしょうか？

それと、日本国民が人間になる道は遠いと思いますが、遠いからとっても毎日苦しんでいると思います。それは日本国内にいる別の在日韓国人の方がどうの、っていうことじゃなくて、私たち自身が人間になれないわけですから、表現の自由があると言いながら、表現が豊かにできない。苦しいことだと思います。

だから長い大きな詩がつくれないんですけれども、生きていること自体が、長い大きな詩を書こうとしてるんじゃないかと思うんですが、最近の詩の中に、まったくそういう芽生えはないのでしょうか。

いま、ハンセン病の療養所のなかから希望と、闇に開いている目から学ぶ、それが先生に力を与えているということだったんですけれども、私はハンセン病の療養所にいないんですが、毎日の暮らしから力を得たいですけれども、どうしたらいいだろうか。

先生は、私の母と同じ歳なんですけれども（鶴見「ハハハ！」）、ハハハと笑われると、私は元気になったんですけれども、どうして先生は、先生も日本国民ですし、けっこう暗い中に暮らしていらっしゃるんですけれども、先生のそのハハハと笑う力はどこから来たのか教えてください。

鶴見　いろんなことを言われましたね（笑）。

金時鐘の全詩集は、立風書房から出ているものがありますし〔『原野の詩 1955 ～ 1988 集成詩集』立風書房、1991年〕、大きな図書館に行けばあります。その中の『新潟』と『猪飼野詩集』。猪飼野っていうのは大阪に昔あった地名なんです。いま地名はなくなってるんです。在日朝鮮・韓国人がそこへ集まって住んでいる地域です。

この金時鐘っていう人は、散文も非常に見事なんです。今の日本で、文章を書く人のトップの人ですね。でも、自分で読んだら下手なんですよ。つまりコンラッドみたいなものだ。「ぼくの日本語は元手がかかってるから」って言うんだけどね。重さのある日本語なんですよ。軽くないんです。散文も素晴らしいものですよ。

そうですね、ひとつだけ例を挙げれば、金時鐘の『クレメンタインの歌』（文和書房、1980年）っていうのがあるんです。これはいいです。私がもっ

とも敬意を持っている友人です。日本に住んでる日本国民外の人です。

トロチェフは、前の詩集を出した昭森社ってつぶれちゃったんですよ。あんまりこういう本を出すものだから（笑）。バルザックって呼ばれている人〔森谷均〕が中心だったんだけれども。バルザックみたいな顔をしている人だから。新しい詩集は手に入るかもしれないです。

じつは、いまつくっている本があるんですよ〔『ハンセン病文学全集』全10巻、皓星社、2002～2010年〕。その中にはおそらく全部入るんじゃないかと思いますけれども、私の一存で言うわけにはいかないです。その部分の選者は私ではなくて、大岡信なんです。ですから大岡信がいいと思えば、そこで読める[27]。

さっき読んだ詩は、特別面白い詩なんですよ。草津に雪が降るでしょ。ロシアにも雪が降るでしょ。想像するわけ。彼はロシアに行ったことがないんだ。（雪だるまの）唇が黒い。愉快に笑っている。非常に複雑な詩ですね。

なぜ陽気でいられるかというと（笑）、医学的に言えば、長生きしてぼけてきたからでしょう（笑）。ゼロ歳から15歳までは本当につらかった。だってね、人間として生まれて来て最初に目を合わせるのは母親でしょ。自分より先に母親を人間として見るわけですから。彼女が私の中に良心を植え付けるわけだ。自分の中の自分なんだ。自分の中の自分によって、常に責められているわけですよ。

「the hound of heaven」という言葉がありますが、なんて訳すんでしょうね。天から犬が降ってきて、自分を追っかけまわすっていうんです。ああいうものが、私の中に植え付けられているんだな。お袋によって。自殺して終わって当たり前です。15歳の時に親父に追放されて日本を出たんで、自分を取り直して生き延びたわけですね。今は生き延びてるから、毎日割合に愉快なんですよ。毎日が日曜日ですね。ハハハ！（笑）

だから飯なんて子どものとき、うまいと思ったことないんです。叱られながら飯食うってうまくないですよ。今は飯がうまいですね。79歳になると未来が少なくなって、まずくなるはずなんです、医学的に。しかし医学者っていうのは、自然科学としての医学だけで判断できるものじゃないんですよ。未来は物理的に少なくなってるでしょう。しかし私が79歳の現在、２歳３歳のときより同じ一椀の飯がうまいんです。叱られながら食ってないからです。当たり前のことなんだ。

おふくろがものすごく怒って言ってたことは、79歳になると、いくらか背景なんかをいっしょにしてリバウンドするっていうかな、とらえるわけ。生き残ってみると。つまり、おふくろは自分を責める人だったんです。

ちょうど志樹逸馬が自分の先輩から文学の趣味をわーっと植え付けられたのは、中世の瀉瓶に似た関係だったでしょうね。そういう濃密な関係は、ハンセン病療養所の外にはなかったと思う。本当に、父子相伝という感じでね。

みなさんは昔の人ではないからわかんないだろうけど、新羅三郎、笙を伝うなんて、箱根の山奥で笙を吹いて、新羅三郎が弟子に笙の吹き方を伝えてるのがあるのですが、そういう師弟関係は、中世にはあったでしょう。ほとんどそれに近いものが、ハンセン病療養所にはあったんですよ。だから、これだけの文学が出てきたんです。

私のおふくろの私に対する関係っていうのは、つらいものなんだ。DV っていう言葉がいまはやってるでしょ。ドメスティック・バイオレンス。あの言葉を見ると私はおふくろを思い出すんですよ（笑）。おふくろは、私をぶったり叩いたり縛り付けたり、声涙俱に下る説教をするんですよ。「あなは悪い人だから、あなたを殺して私は死にます」って。だから、たいへん。

それはね、79年のパースペクティブでゆっくり見ると、おふくろの内部の自己嫌悪っていうものが、よくわかるんですよ。ああ、おふくろも一生懸命だったんだな、って。早く死んだの。そういうことがわかってくると、結局おふくろに対しても寛容になってくるし、大変に私を愛したことは事実なんですよ。愛するということがぶったり叩

(27) トロチェフの詩集『ぼくのロシア』（昭森社、1967年）、『うたのあしあと』（土曜日術者出版販売、1998年）は『ハンセン病文学全集７ 詩二』（皓星社、2004年）に抄録されている。

いたりすることなんだから（笑）。きょうだい４人の中で、私が愛されたことは確かなんですよ。いつも私をぶったり怒ったりしているから、ほかの３人は土俵の外ですからね。だからかえって愛情の疎外があるわけだな。

いま生きてみると、私が書いていることは、すべておふくろに対する手紙なんです。そんなこと言っても、私の言い分も出てきますからね。それが、私の著作の源泉でもあるんです。だから、どういうふうに人間になってくるか。これ、むずかしい問題なんですよ。人間１人１人が突き付けられてる問題なんです。

だけど、内閣にいる人たちは、先進国として、国民としての誇りを持つ。明治国家に返るっていう話でしょ。大東亜戦争まで誤魔化して、あれまで誇りにするところまで行くんだから。無茶な話ですよね。人間としての道を閉ざして、日本国民への道を、どんどん鞭をあてて攻め込んでいくんだ。どうしたもんでしょうね。

私は、今日は自分の偏見をぶちまけているようなところがあるんだけれども（笑）。人間になるというのは、偏見のない人間になるというのは、学校制度が植え付けている誤解なんですよ。ふだんは私も自分の持っている偏見を、いくらか行き過ぎを抑えるようにして、表に出さないように抑えてるんですよ。だけど、私を生かし動かしているものは、人間への方向に行かせているものは、私の持っている偏見なんです。

日本国民はどういうふうにして人間になれるのか。じつはそれこそが最大の問題なんです。私は、ハンセン病の文学が、人間になるその道しるべをつくっていると思いますね。（拍手）

凡例

・本講演は、2001年７月１日（日）、多磨全生園コミュニティセンターにて開催された、高松宮記念ハンセン病資料館開館８周年記念講演会、鶴見俊輔「ハンセン病との出逢いから」の記録である。音源は、当館所蔵のデータ（資料ID：74547、74548）を使用した。
・本講演記録には、現代の社会通念や人権意識に照らして不適切な表現や語句が見られるが、当時の時代的背景と資料的意義を考慮し、そのままとした。
・読みやすさを考慮し、文意を損なわない範囲で、字句の添削、整理を行った。
・見出しは木村が付けた。
・文中の〔　　〕内は、木村による補記である。
・内容を理解するうえで最低限必要だと思われる事項のうち、ハンセン病問題に関係する事項に限り、注釈を付けた。注釈は木村によるものである。
・本講演記録の公表について、鶴見俊輔氏の著作権継承者に同意を得た。

（木村哲也）